第4回「新鋭俳句賞」候補者一覧

番号	題	俳号	所属結社	会員非会員	男女	年齢	住所
1	父の櫂	金澤　諒和	澤	会員	男	48	大分市
2	蟻眠る	渡部　有紀子	天為	会員	女	40	横浜市
3	鶯の子	山口　貴士	姫路青門	非会員	男	35	兵庫県
4	待つたなし	菅　敦	銀化	会員	男	48	千葉市
5	鍵盤の音	桐野　晃	門	会員	男	39	高槻市
6	塔	吉田　林檎	知音	会員	女	49	東京都
7	息の熱	池田　瑠那	澤	会員	女	43.	東京都
8	蠅叩	若杉　朋哉	なし	会員	男	45	さいたま市
9	鏡の奥	矢野　玲奈	天為	会員	女	44	平塚市
10	微風	小関　菜都子	椋	会員	女	46	東大阪市
11	たゆたふ	市川　綿帽子	楽園	会員	女	43	横浜市
12	荒羽吐の国	佐藤　涼子	澤・蒼海	非会員	女	45	仙台市
13	ふくふくと	上野　犀行	田	会員	男	47	横浜市
14	サーチライト	笠原　小百合	田	会員	女	36	東京都

第４回　新鋭俳句賞

候補作品集

２０２０．１０

公益社団法人　俳　人　協　会

第4回　新鋭俳句賞　候補作品集

【目　次】 作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

No.	題	ページ	当初受付番号
1	父の櫂	3	36
2	蟻眠る	4	38
3	鶯の子	5	59
4	待つたなし	6	23
5	鍵盤の音	7	21
6	塔	8	40
7	息の熱	9	48
8	蠅叩	10	8
9	鏡の奥	11	25
10	微風	12	41
11	たゆたふ	13	24
12	荒羽吐の国	14	29
13	ふくふくと	15	22
14	サーチライト	16	39

第４回「新鋭俳句賞」評価得点集約表

2020.09

1位5点、2位4点、3位3点、4位2点、5位1点として集計

整理番号	表　題	選考委員				評価得点計
		石田郷子	小島　健	西山　睦	堀本裕樹	
1	父の櫂	4	4			8
2	蟻眠る	1	2		5	8
3	鶯の子		3	5		8
4	待つたなし	2		1	4	7
5	鍵盤の音	5				5
6	塔		5			5
7	息の熱			4		4
8	蠅叩	3				3
9	鏡の奥			3		3
10	微風				3	3
11	たゆたふ			2		2
12	荒羽吐の国				2	2
13	ふくふくと		1			1
14	サーチライト				1	1

整理番号 1

父の櫂

炎天やドライアイスの中に父
白靴に砂の記憶のありにけり
陶枕にむらさきの雨降り続く
大鯉の背の割り切れぬ雲の峰
おしろいのまだ花のなき背丈かな
天を衝く柏手ひとつ生身魂
一つとして同じ雲なし蕎麦の花
梨といふもつとも水に近きもの
教室にまづ立たせたる案山子かな
蒂すでに枯れたる柿やみづみづし
蜜柑剪る持ち手褪せたる鋏もて
五年寝かする大吟醸ぞ海鼠割く
釣針を噛みちぎりたる河豚(ふくと)かな
猟犬の殊勲の爪を休めたる
潤目干すこの海のほか海知らず
源泉をまづは干したり初湯殿
竜の玉星の涙と思ひけり
寒濤や錆びし梯子のなほも錆ぶ
牡蠣割女牡蠣の急所を突きにけり
白魚のおよその眼量らるる
涅槃図に今生の風吹き渡る
寿司飯の湯気の上がりて花の雨
この星は燃えず磯巾着に夜
奈落より還つて来たり稽古海女
亡き父の櫂もて挑む卯波かな
あちこちを剪られ全き薔薇となる
葉桜や瞼は死者のためにある
雨蛙包む両手に跳ねにけり
しばらくは遺る駅舎や濃紫陽花
父逝きてより父の日を忘れざる

整理番号 2

蟻眠る

初御空胸に真白き矢を抱く
飛込みし鳥の重さや花万朶
春ショール母美しく老いにけり
我が手相かくも複雑春の風邪
花籌夜は西行の衣の色
体内の道は一本聖五月
母の日のものやはらかく煮上がりぬ
芍薬の散る一片のなほ真紅
梅雨寒の達磨にしかと膝小僧
闇に身を逆さに委ね蟬生まる
朝焼や桶の底打つ山羊の乳
山裾の水の整ふ大植田
一粒の雨より興る草いきれ
蟻塚の奥千萬の蟻眠る
渡り鳥折紙にある山と谷
敗荷のしかと立ちたる水の闇
落蟬の大いなる翅濡れてゐる
竹節虫の機械仕掛のこの歩み
子のありて夫婦の孤独ちちろ鳴く
今朝の冬光ついばむ鳩の群
縄跳や肩幅に空立ちあがる
冬木の芽つぶやく声は母に似て
てのひらの窪みの蒼さ冬ざるる
あやとりや互ひに触るる膝の骨
返信をしない愛あり薪を割る
マスクして街の孤独を飼ひならす
靴音の凍てて羅馬の石畳
狐火は女のまなざしと思ふ
狼の影長くして大雪原
考へる人の拳に蝶凍つる

整理番号 3

鶯の子

山渡る影となりたる春の鳶
はこべらや軒の下なる洗濯機
鶯の子の見つけたる一音目
指先を弾き返せる踊子草
鶯や持ち手の硬き革鞄
うららかや眼裏に座す阿弥陀仏
アスパラのややふくらんでいるところ
青田風立ちし水面の光かな
早苗饗の頭数より多き箸
写真家の歩む砂丘や雲の峰
夏の海素足の妻と孕み子と
碧き夜の杉の間をゆく蛍かな
持ち寄りしロゴの素案やソーダ水
古里の蚊に踝を刺されけり
炎天の選挙ポスター歯を見せる
颱風の来て沖縄の民の立つ
口づさむ歌の名知らず田草取
籾積みし貨車の短きクラクション
亀虫の翅乾かせる雨上り
眼前の尻逞しき祭かな
糸瓜忌の醤油垂れける紙の上
秋の蜂小腰屈めて巣に帰る
朝霧のT字路に出すウインカー
初冬の風立ちぬれば山羊の鳴く
冴ゆる夜の酒場に若き議員かな
サックスのケース背負う子クリスマス
わが名にも欲しき字選ぶ筆始
初春の荷台に山羊の飛び乗れり
焚火にも定座生まれし宴の夜
寒月や猟師の小屋の一升瓶

整理番号
4

待つたなし

晩秋や風の著けき人造湖
緬羊の群れ秋霖とともにあり
完熟を迎へたる街黄葉どき
己が身を栗鼠に与ふるべく木の実
珈琲の香気芬芬鶸のこゑ
ふところのユーロ・ポンドや冬に入る
硬水のボトル落葉へ倒れたり
聖堂は声を灯して冬あたたか
パズルめく壁の落書き神無月
乗継ぎのホーム凩待つたなし
通訳の必要のなき寒さかな
老紳士マスクのわれを疫病(えやみ)かと
短日や地上を地下を人の波
息白しボディチェックの荒々し
軍艦と肩を並ぶる浮寝鳥
冬ざれや風の加勢を拒む木々
潮の引く入江の眺め冬館
絨毯の染み灰色の脳細胞
冬霧を往く砂利道の音頼み
霜夜はや円形広場から塔へ
刺青とピアス焚火の脇を過ぐ
城の旗ひときは高き冬の空
白鳥と日差を分かち合ふ水面
枯芝に糞(まり)の乾きしひとところ
ラグビーの子等のこれほど絵になるか
ひざまづく胸の真向ひ冬薔薇
衛兵のごとく黙する寒鴉
目のいろの異なるひとと冬茜
呼び鈴の凍てつくほどに星遠し
淅瀝や禍の深淵のうすごほり

整理番号
5

鍵盤の音

入学の児にからつぽの机かな
足の浮く入学式のパイプ椅子
入学や先生の名の一字づつ
教卓に隠してありぬ種袋
遠足とは弁当を背に歩くこと
三班のザリガニ死んでゐし朝
をなもみを先生の背の知らぬふり
目隠しの児に降らせたる落葉かな
日向ぼこ泣きやまぬ児の横にゐて
ストーブやわらつておなら出てわらふ
母の手のつめたさを受く保健室
やがて児の一人で走る凧
縦書きの心を帯す新学期
ぶらんこの鎖揺すつて帰りけり
雲梯の上を歩きぬ更衣
友だちの家の匂ひの麦茶かな
全班のブレンドカレー夏の山
林間学校を発つ時に着くバスありて
模造紙に処暑の鋏を辷らせて
秋の蚊を払ひつつ集合の笛
木の実踏み継いでこはしてゆく遊び
児が動かすスポットライト冬うらら
セーターを名探偵が嗅ぎにくる
からうじてうすらひに乗るほどの石
鍵盤に鍵盤の音卒業期
立つ時の音の一斉卒業式
町の音の中なる卒業証書授与
卒業歌校歌秒針無き時計
卒業の校歌母校となりゆけり
卒業や午後の花塵を掃き寄せて

整理番号
6

塔

本棚のかくもでこぼこ春の風邪
目借時みんなが笑ふので笑ふ
路地の鳩ふくれきつたる日永かな
朧夜や体に悪きもの旨し
蕎麦を食ふやうに蜥蜴を岩が吸ふ
黄金虫歩みつつ翅収めをり
唇に触れ舌に触れさくらんぼ
額から髪剥がれざる暑さかな
行きもせぬ旅の算段冷酒酌み
月の土地買はんと思ふ昼寝覚
たましひの喜んでゐる麦茶かな
老若男女国籍不問上野秋
走つても遅参なるべし秋日傘
台風の去りて月光世界かな
鯖雲や武蔵野を縫ふ川いくつ
灯を掲げ女神雄々しき黄落期
晩秋のピカソを訪へば壁真白
秋深き学芸員の目のうつろ
文豪の忌みたる塔に秋惜しむ
大阪も新大阪もしぐれけり
雪催書店に入ればカレーの香
冬ざれや枝の先まで豆電球
日の温み風がさらへり初仕事
寒梅を咲かせてかくも細き枝
春隣ベルトのあたる臍あたり
旧正の風打ち返す大漁旗
病得てゐるかもしれぬ霾ぐもり
街の灯に毒を抜かれし紅椿
うららかや辻を自転車三輪車
青麦や指揮棒見つめ合唱隊

息の熱

内定破棄告げられたるよ春北風
進路調査無職にチェック卒業す
無職にて卒業多摩川べり駈くる
明日ありと信ず目刺を頭より食ふ
寝ねがてに薄紫色（うすいろ）させる春の月
ぴしと貼り履歴書写真ぢんちやうげ
春雪の駅に昔のにほひかな
面接や斑雪踏みきし靴替へて
手のくぼに消毒液や嚏れる
毛羽立てる不織布マスク花曇
便箋の罫の紺青花の冷
ゆふざくら柱時計の錘照る
真夜を散る桜大樹を魔王とも
買ひ出しのリュックぱつぱつ残る花
花過の水屋箪笥の玻璃戸かな
葉桜やマスクに籠る息の熱
余花の雨病休代理の職得たり
手づからに前髪切りぬ新樹光
教室の窓全開や楠若葉
教科書の頁まばゆき薄暑かな
夕雲やフェイスシールド取れば汗
分散登校実桜踏んで乙女子は
午前対面午後は遠隔授業梅雨
白墨の折れくち真白梅雨晴間
夏暁やひよこに遣りて野菜屑
トロフィーのリボン吹かるる青葉かな
保健室登校ふたり濃紫陽花
夕焼濃し渡り廊下の木の簀子
白南風やラップに包み塩むすび
綴織（タピスリー）の世界地図撫づ梅雨の明

整理番号
8

蠅叩

新年の靴を揃へて上がりけり
たくさんの椿の咲いてうす暗く
天井の隅に風船休みをる
春水を跳ぶとき人の顔の見え
たんぽぽの咲いて大地の盛り上がる
朝寝より起きたる声のすこし変
砂山の砂のこぼるる日永かな
ころころとしたる粽のつながれる
白玉のくぼみを舌に感じをり
長梅雨の博物館の廊下かな
梅雨寒く言葉少なく仕事せり
蠅叩持ちてゆつくり舞ふごとく
吹いてくる涼しき風の方を見る
噴水の止みたるあとの夕長し
寝冷の子あぐらをかいてゐたりけり
転がりて速き西瓜の模様かな
これ以上薄く朝顔咲けぬなり
砂壁に映つてゐるは秋風鈴
辛うじて楊枝刺さりし次郎柿
秋風や畳の上のご飯粒
秋寒し小さき石の一つ出て
昼からの客を送りて秋の暮
始まりも終りも衣類冬支度
掃くほどの落葉ならねどここかしこ
短日や小さき川に顔映し
嘘するとき顔長くなりにけり
いま拭きし炬燵の足の美しき
日向ぼこ日向に酔うてしまひけり
夕方は水か氷かわからなく
春近し机の下に子は隠れ

整理番号
9

鏡の奥

濃淡の木陰夏蝶もつれ飛ぶ
容れ物のプラスチックに苺の香
緑陰の上よりジェットコースター
風鈴や窓を閉めても雨の音
かき氷潮の香のする人と
蝉しぐれ何かとりつく靴の底
厚切りのトマトするりと紙の皿
秋冷の畳トランプはじまりぬ
鰯雲家族の薬受け取りに
窓広きロビーのピアノ鳴る月夜
しぐるるやゆつたり止まるオルゴール
犬の曳く荷車に絵と初雪と
冬日指す石を啄む鳩の輪に
冬帽子ずんずん遠き坂の上
明滅す鏡の奥のクリスマス
冬の月硬きベッドに髪あふれ
舌すこし水に濡らして恋の猫
額装のユニフォーム手に卒業す
ミモザ散るアンティークタイルの床に
雛仕舞ふ箱も昭和のままであり
春愁のからだみしみし伸ばしけり
さへづりの裏にうつりて囀れり
動き出す食器洗ひ機おぼろづき
指先の修正液と春惜しむ
思ひどほりに蚕豆の茹で上がる
礼拝はネット配信聖五月
揺れながら明日を考へ罌粟の花
新緑や校舎の窓に人気なく
校庭の高きフェンスや濃紫陽花
鳥籠の鳥より自由梅雨曇

整理番号
10

微風

持たされて四肢あるごとき干鱈かな
独身寮らしきベランダ木の芽風
若布干すを見に行きてもう戻り来る
私以外に春の匂ひを云ふ人よ
春落葉といへど袋の三つかな
ジョギングの思はぬ速さ水温む
茎立や移動スーパーより演歌
休館の日を賑やかに剪定す
百合匂ふパーティー会場に微風
夏帽子似合はぬ中のひとつ買ふ
起こすやう朝鮮朝顔を掃きぬ
家財道具と花合歓の下眠る男
青梅雨や泥でありしが泳ぎ出し
麦茶片付けてさつきの客のこと
蜘蛛の囲の勁きを切りて少し鬱
昼寝覚まだふるさとにゐる私
見回してより突く鐘や青葉騒
亀の子が亀の子ほどの石の上
遠近に犬鳴き合へる盆用意
かなかなや排水どうと家を出て
捨てられし中にまつたき菊のある
何もなきところを焚いて秋収
白萩や夜の集ひに開く門
換気扇全力冬の川に向き
蒲団干す家信用に価する
雪下すための梯子を雪の中
面接の後のマスクを眼まで
数へ日のコピー機を出てぬくき紙
傍らに沼しんとある初詣
大年のしづけさに似て三日かな

整理番号
11

たゆたふ

ピアスの痕触る蚕豆剥きながら
フィナンシェに正しき割れ目麦の秋
子宮なき躰は軽し星涼し
愛請ひて女三代水芭蕉
サンダルの響き遠のく家出の夜
熱帯魚散り散りにホスピスの昼
死を告げむ鴉の声や西日中
遠泳といふ人界を離るるは
夕映にわたくしの殻水着干す
落日を葡萄のごとき蠅取紙
ひきがへる証明写真の頬痩けて
ゼラニューム性のはざまをたゆたひて
われに棲む触れられぬひと花氷
風死すや軍桟橋前停留所
敗戦日十円玉の酸き匂ひ
前世は勲三等の鬼薄
人はみな一本の樹よ星月夜
モップ立ててマイクスタンド夜学生
香辛料の色それぞれに秋闌けぬ
小春日に生まれたのよと言ひ遺し
病床の小さき聖樹に星を足す
ライブハウス出れば初雪耳を打つ
汁椀に白髪葱てふ美しき反り
凍空を溶くや長頸鹿（きりん）の黒き舌
あの群に母鳥もをり雲に入る
サイネリア吾はときをり我になる
復縁の卓に蕾のチューリップ
籠る日の酢飯に散らす桜漬
日雇で磨く巾木や春愁
建材の塵堆し新樹の香

整理番号
12

荒羽吐の国

蒲団かぶりカリブのラジオ受信せり
自動販売機内部素通り硬貨冴ゆ
一礼す喪主はふたたびマスク着け
ミニスキー履きて二キロを登校す
雪晴や割下に煮る白鼻心
狐火を撃ちしとマタギ酒酌みて
雪催青菜絞りし指のあと
初御空当直明けの靴投げ捨て
小豆粥吹きたる息に凹みたる
ポニーテールの教師赴任す花林檎
春宵や奇術師の掌に紙幣燃え
しやぼんだま巨大ぞ裡にピエロ居る
春灯のやすりに磨くかかとかな
玻璃窓に貼りてハンカチ花刺繍
夏帽を投げてランナー加速せり
薫風やトランク並べ古書の市
箱庭にビーズの波の輝けり
フィドル弾き裸足ぞ野外音楽堂
ゴーグルにとめて前髪夏の雲
やませ来る漆喰壁に掌の脂
風死すや備前焼なる焼夷弾
茄子漬を洗ふ故郷の水道に
指に千切る鰯の頭豚にやる
裏庭に河童釣り上ぐ餌は胡瓜
部下として名刺供ふる墓参かな
爽籟や裁たれて匂ふ木綿生地
真白なるパズル一片文化の日
山越ゆるルーフキャリアに今年米
肌寒しスリッパ収め滅菌庫
セロファンを曇らす菊の呼吸かな

整理番号
13

ふくふくと

山の日の裾野を上る臨時バス
赤とんぼ岬の鼻を巡り来し
盂蘭盆のカフェに集ふ大家族
警報と同時に地震の来る夜長
横須賀にスカジャン光る秋日和
空つぽの横断旗入れ秋の風
襤褸切れや案山子の首に引つ掛かり
秋の昼キッチンカーを横付けに
白息にことばを乗せてレノンの忌
足場組み聖樹を空へ立ててをり
デパートの中に改札十二月
東京は家を敷き詰め雪催
蛍光のジャンパー人の形せる
はやく着く電車を選び初仕事
飛び出せる子の看板や日脚伸ぶ
ロッカーに詰め込むコートあと一枚
旧正の始まるみなとみらい線
風光るソーラーパネル陽を集め
良品を届けてもらふ万愚節
ふくふくと寝具を重ね花の宿
新社員より丸文字の電話メモ
スタンプを二倍に花のころの店
さざなみを数ふる声やこどもの日
配線の張り巡る壁梅雨曇
部門長以下三十人の夏祓
ひと息に飲みてラムネの瓶返す
出張の三ツ星ホテル寝冷せる
似顔絵に黒子描き足す梅雨晴間
北極を崩してみるやかき氷
球場の声のとどき来籐寝椅子

整理番号
14

サーチライト

ハンカチの花咲く朝の検温す
夏蝶と道ゆづりあふ神楽坂
木の匙のぶつかる固きシャーベット
眠られぬ夜に金魚を起こしたり
護符貼りし厨の柱はたた神
肉球のひたひた跣足のぺたぺた
空白の灼けをり第二駐車場
心拍数上げサイダーを飲み干しぬ
草いきれ蹴散らし人馬一体に
光ごと水を押し出す秋の風
秋蝶や道の真中の一里塚
昨日見し夢の続きの花野道
かなかなや金星のひときは光り
秋出水泥のにほひの鼻につき
剥き出しの幹の白さや台風禍
うつし世やサーチライトのごとく月
デッサンの鉛筆越しの冬林檎
兎抱く早鐘の心臓を抱く
雪山の視界良好かがやける
冬耕や烏流されゆく御空
凍蝶の体だんだん軽くなる
咳ひとつ羽虫の骸飛びゆける
便覧に並ぶ文豪春の昼
恋猫や袋小路を飛び越えて
休みなく光散りばめ春の川
初蝶の空に焦がるる低さかな
夕映の手には土筆やまたあした
養花天明るき色のヨガマット
敬称をつけて呼ばるる仔猫かな
飛べさうにまつすぐな道風光る